

富山でも災害は起こり得ます その時あなたはどうしますか



2017年12月17日

富山大学地域連携推進機構 生涯学習部門

目 次

1. はじめに
2. ワークショップ進行表
3. 話題提供と話し合いの流れ
4. 各グループ発表
5. アンケート結果
6. おわりに
7. ワークショップ案内チラシ (付録)

はじめに

富山大学地域連携推進機構生涯学習部門では、地域のみな様方とともに考え語り合う学びの場として、地域課題解決型のワークショップを開催しております。本年度の「富山大学生涯学習ワークショップ 2017」では、「富山でも災害は起こり得ます。その時あなたはどうしますか？」というテーマで、平成 29 年 12 月 17 日（日）に開催いたしました。

今回で 6 回目の開催となるワークショップですが、そのテーマの一つの柱となっているのが、本年度のテーマにもなっております「災害」です。

本学生涯学習部門で初めてワークショップを開催いたしましたのが平成 23 年度になりますが、この時のテーマが「災害が起きたらどうなる？」でした。翌年度には、文部科学省が進める「地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議」において「災害が起きたらどうする？」をテーマに開催いたしております。また、平成 27 年度には、「高い都市レジリエンス：私たち市民は何を考え、何をなすべきか？」を開催してきております。

近年、自然災害が全国各地で頻発しており、ここ富山でも被害が出ていることから、地域のみな様方の災害に対する関心も高く、こうした「災害」をテーマとしたワークショップに積極的なご参加をいただいております。そのお蔭をもちまして、「災害」というテーマが生涯学習部門のワークショップのテーマとして定着してきており、それはとても意義深いことではないかと喜ばしく思っております。

今回のワークショップでは、本学大学院理工学研究部（工学）の原隆史教授に、「我が国の防災事情、富山で起こりうる災害、我々（市民）が準備しておくこと」をテーマに話題提供をいただきながら、参加者のみな様には、「富山で起こりうる自然災害」や、「災害が起きた時、何が大切でどのように行動するか」、「災害に対してどのように備えればよいのか」、について考え語り合ってきました。

当日は、大雪注意報が発表される悪天候にもかかわらず 35 名の方にご参加いただきました。一般市民の方々に加え、富山県防災士会会長の小杉邦夫様をはじめとした多数の防災士の方々にもご参加いただき、また、生涯学習部門の前部門長の竹内章富山大学名誉教授にもお越しいただき、実りある語り合いを展開していただきました。この場をお借りしてご参加いただいたみな様方に感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

本報告書は、当日行われた実り豊かな語り合いの内容を報告するものです。ご参加いただいたみな様方には、当日の語り合いを思い出していただき、初めてご覧になる方には、当日行われた語り合いを追体験していただき、「災害」について考えるヒントにさせていただけましたら幸いに存じます。

平成 30 年 1 月 31 日

富山大学地域連携推進機構・生涯学習部門長

森口毅彦

富山大学生涯学習ワークショップ 2017 進行

開会

趣旨説明

ワーク 1

- 富山ではどのような自然災害が起きる可能性がありますか？

話題提供 1：防災の必要性

- ◇ わが国の防災事情と富山で起こりうる自然災害

ワーク 2

- 富山で災害が起きた場合、あなたどのようなことが大切になると考えますか？
- その時あなたはどのように行動しますか？

10分休憩

話題提供 2：防災のポイントとなること

- ◇ 私たちがなすべきこと（家族での防災会話、地域とのつながりや訓練の重要性について）

ワーク 3

- 今、私たちに必要なことは何ですか？
- 今、私たちが備えることは何ですか？
- 本日のワークを振り返る時間です。

発表

- 発表（1グループ3分）

原先生からの講評

閉会

話題提供

わが国の防災事情、富山で起こりうる災害、我々（市民）が準備しておくこと

富山大学大学院理工学研究部 教授 原 隆史 先生

本ワークショップでは、原隆史先生から以下のような話題提供をいただき、話し合いを進めました。

- 私たちは、「災害がたくさん発生する国」で暮らしている。従って、防災は不可避の生活課題である。地震—構造物の崩壊、津波の発生。大雨—堤防の決壊、崖崩れ、地滑りなど。
- 国や時自治は様々な防災対策をおこなっているものの、それに頼りきってでは安全・安心な暮らしを送ることはできない。自分の命は、自分自身で守る努力も非常に重要なことである。
- では、富山はどうだろうか。一般に、「富山は災害が少ない地域である、だから安全である」という考え方がみられるが、これは本当だろうか。
- 富山で起こりうる災害として、地震（揺れ、火災、液状化、津波など）、降雨（浸水など）、寄り回り波（浸水など）、火山噴火（登山者被害など）、雪氷災害（孤立集落など）、がある。特に富山では内陸型（活断層）地震の危険性が指摘されている。
- 神戸地震が起きる前、神戸は富山よりも地震に安全な地域と考えられていた。しかし、現実には数千年に一度の地震でも突然襲ってくる。富山で暮らしていても、富山で暮らしているからこそ、防災への備えはとても重要である。災害は他人事ではないと考えるべきである。
- では、我々は何をなすべきか？ ①防災マニュアルの作成、②自主防災組織の必要性、③定期的な避難訓練の必要性、・・・など。まずは防災意識を高めることが重要である！

本ワークショップでは、まず「富山ではどのような自然災害がおきる可能性があるか」を考え、原先生からの話題提供を受けたのち、「災害時、どんなことが大切になるか」「その時あなたはどのように行動すべきか」について話し合いました。最後にグループワークを振り返り、今私たちに必要なこと、備えるべきことは何か、について考えました。

各グループ発表

Aグループ

<富山ではどんな災害が想定されるか>

A班から発表いたします。大学院生の皆さんにまとめていただきました。まず富山でどんな災害が想定されるのか、ということについて話し合いました。主に土砂災害、豪雨災害、フェーン現象、台風、この間も大きな台風が来ました。最近は大きな地震はないですけど、呉羽山断層による地震が考えられます。それから雪害、雪の被害など、いろいろと想定されています。また、よりまわり波。これは、入善町の方で大きな被害があったということで、あげました。自然災害の一種としては、この間南砺市の方で熊に襲われたということがありました。これも自然災害ですし、もっと天文学的に考えると、宇宙からの落下物ということで隕石とかもそういう事例に入るかと思われれます。

<災害が起きたらどうするか>

次に、災害が起きたらどうするのか、ということについて話し合いました。まずは情報収集ですね。色んな災害がありますが、水害にしぼって考えると、どこから浸水しているのか、とかそういう情報収集が重要です。そういった情報収集に基づいて避難していく。それから安否確認。皆さんのご家族だとか、近所の方だとか、災害時はそういう安否確認が必要になってきます。例えば水害では、どこにでも避難すればいいということではありません。指定された避難場所が浸水していたら元も子もないので、その辺は最新の情報収集をふまえて、どういった避難場所がふさわしいのか、今避難すべきなのかを判断する。すでに増水している場合は垂直避難、自宅の2階3階とかへ避難するということになります。

<災害に対する備えをどうするか>

最後に、災害に対して何を備えるべきかについて話し合いました。先ほど言いました情報収集につとめる、日頃から危険な場所を把握することが大事です。避難場所はどのような避難場所になっているのか。地震の時はよくても水害の時はダメだとか。そういった日頃の情報収集です。それから、避難した先で必

要になる避難グッズをいろいろと用意する必要があります。また、日頃からの地域コミュニケーションも大事です。近所づきあいだとか、町内行事、例えば納涼祭に参加するだとか。納涼祭では焼きそばだとかを作ったりしますが、これは炊き出し訓練の一環になります。行事の活性化です。

そのためには、防災に対する意識の高揚が必要ですね。防災は多くの町内の皆さんを巻き込んでいけないといけないと思うので。私は、町内で自主防災組織のリーダーをさせていただいていますが、現実には避難訓練に参加される方というのは、やっぱり年齢層が高い方で、若い方は参加がなかなか難しいのかな、と悩んでおります。そういう中で、若者の意識改革も必要だということになりました。30代、40代の方というのは、小学生のお子さんがおられたりするので、それをきっかけにして町内の行事に引き込む。最近、学校教育では防災教育が取り入れられていて、それを家に帰って親と話し合っ、避難所はどこだろう？という家族の会話がうまれ、意識が高揚するのかなと思います。今後こういう機会を教育の中でどんどんできるようになって、年齢の幅の広い意識の高揚を期待したいな、と思います。



Bグループ

<重い時間を共有する>

1時間、2時間ですか。本当に重い雰囲気です。時間が流れていきました。テーマがなじみがないことなんで、言葉を選びながら、絞り出すような気持ちで時間を共有しました。唯一みんなでまとまったのが、発表の順番で、A班が一番最初に手をあげたんだから、次はB班だろうと。よし行け、というので出てきました。私らは、院生さんを入れて6人で話をしたんですけども、その中で出てきたキーワードを紹介します。

<目から鱗>

先生のお話には、目から鱗、というのが何回もありました。先生から途中2回ほどお話がありましたけど、エーッとすることがたくさんあった。一例をあげると、倒れた冷蔵庫をのり越えられる高齢者がどのくらいいるだろうか、という話がすごく心に染み入りました。高齢者に限らず、倒れた冷蔵庫を本当に越えられるかなと思って。思わず自分のうちの台所が目には浮かびました。他にもいくつもエーッとすることがありました。

<知らないことが多い>

それからもう一つ、地震とか水害とか、漠然と災害の話が出ましたが、出せば出すほど災害のことを知らない。出したあとの「ああじゃないこうじゃない」という話がなかなか出づらかったです。その次に話せるだけのものがないという。そういう意味では苦しみか時間の時間でしたね。それで、こういうワークショップのような場に来て、災害の話を勉強するというのは大事だな、というのが最後の結論でした。

<どこから手をつけるか>

この点をもう少し詳しく話をさせてもらおうと、災害という大きなテーマの中で、どこから手をつけていいか、なかなかわからない。お互いの住んでいる町内についての情報交換をしてみると、避難訓練をやっているという人もいれば、そんなの出たことないって人もいます。このグループは富山市だけじゃなくて全県から集まったようなグループでしたけど、住んでいる地域によってとら

え方が全然違う。じゃあ、どこから話をしていけばいいのか。どうしても水害とか、そういう身近なところに話が行きがちです。そうすると、今日話を聞いた地震のところまで行けないねっていう話になりました。みんながイメージできるところから話をしていかないと、地震の話ってなかなか地域の皆さんに伝えきれないよね、という話になりました。以上、話し合いの雰囲気だけお伝えします。

Cグループ

<富山における災害>

グループの話し合いで出てきたのは、呉羽山断層が動いたときにどうなるか、ということです。地震の話です。特に、地下には用水が走っていますので、地震が起きたときにどうするか、どうなるか。上の方からどんどん水が流れてきたときに、どうなるか心配があります。それから、地震以外の災害として、富山県には大きな一級河川がありますが、そこに流れ込む中小河川に注目する必要があります。二級河川は、大きな洪水に対応するだけの堤防の高さが決められて整備されています。しかし、中小河川はそうではありません。70年に一度の大雨に対しての計画で整備されておりますから、当然、同じような雨が降った場合に中小河川が氾濫する危険性が高くなります。

<災害への対策>

災害時には、家族の安全、安否確認が重要になります。それから大事なのは高齢者の避難誘導、とにかく近所の人と助け合って避難することが大事です。地域に自主防災組織があったとしても、なかなか住民の関心が薄いということも課題として出ておりました。ともかく訓練に参加するのが大事だと。院生の方と話した中では、地域の案内が届いていないという問題も出ておりました。

それから、災害の時は、日中は高齢者が地域にたくさんいて、若い人がいないということになれば、やはり大学生たちの力を借りるということも大事ではないかという話がありました。そういう点では、ふだんからコミュニケーションをとっておく必要があるのではないかと思いました。

とにかく防災意識を高める、そして地域でのコミュニケーションをとることが大事であるということです。それと、災害についての情報を共有すること。他の発表でもあげられていましたが、自分の住む地域で起こりうる災害をしっかりと知ることと、災害の種類によって対応がいろいろと変わってくるので、災害別に分けた対応の仕方を考えておくことが大事ではないか、という話になりました。以上で終わります。



Dグループ

<ハザードマップ>

D班の発表をいたします。まず、富山で想定される災害については、水害、地震、よりまわり波という話が出ました。それに対しどのような対策が必要か。まずハザードマップです。これは僕が指摘したのですが、今のハザードマップで本当に大丈夫なんだろうか、という素朴な疑問としてありまして。それで、現状のハザードマップ以上を想定したものでないといけないんじゃないか、と切り出したわけです。すると、そもそもハザードマップ見てますか？という話がグループ内で出まして、ハザードマップを見たことがないという話がちょぼちょぼと出てきました。そこで話し合われたことは、まずは住んでいるところにどんな災害が起こるか、起こり得るのかというリスクをしっかりと知る必要があるのではないかということです。

<災害の種類や状況に応じた対策を>

災害の種類別の行動、ということも話題になりました。実際に地震があったとき、水害があったとき、その時どのように行動すべきなのか、考える必要があるという話が出てきました。まず身近な自分の家について考えてみると、築年数が古くなってまいりますと耐震とかの面でいろいろな弱い部分が出てくる。自分の家の弱点を知ることが大切ですね。災害対策を、家全体ではなくとも、せめて自分の身を守る場所だけでもおこなえば違ってくると思います。グループのメンバーの中には防災士の方もおられるので、そういうアドバイスがありました。

続いて、これと少し方向性が違う話ですが、災害対策のためには近隣住民との協力関係が重要だという話になりました。僕もそうなのですが、最近では近所にどういう人が住んでいるのか、というのがわからなくなってきました。この点をはっきりと課題とする必要があるということになりました。

<災害にどう備えるか>

最も重要なのは事前の備えであるという話になりました。これは、災害への対策とか補強とかだけではなくて、訓練が重要だということです。今回のワークショップのように、災害に対する知識をしっかりと知ることも事前の備えの

中に含まれるという意見がありました。

自分の身は自分で守るという自助の考え方に基づいて、まずは知識としてリスクを考え、自分の弱点はどこにあるのかを知る。これは、建物とか地域などのハード面だけでなく、ソフト面も含まれます。ソフト面は、例えば家族と連絡を取り合うルールなどです。自力で脱出するのが困難な方は、あらかじめ自分から、自治会とかにそれを伝えておく必要があるという意見がありました。

それから、共助という話も出ました。先ほど述べたように、人口が多くて顔の見えない関係が増えています。同じ町内でも誰がいるのかわからない、という問題に対しては、これは地道な努力にかかってくると思いますが、日頃の近所づきあいを深めるというところが共助という観点で重要です。これが災害への備えという話題で出てきたことです。D班は以上でございます。



<ワーク1>
 ○水害
 ○地震(呉羽山断層)
 ○寄り回り波

<ワーク2>
 ○ハザードマップ以上を想定する。
 ↳ まずは住んでいる所の災害を知る。 cf.過去の土地利用
 ○災害の種類別の行動
 ↳ でも、同時に来ることも...
 ○自分の家の弱点を知る ⇒ 対策補強
 ↳ 対策診断 etc. ↳ 居室の一部にて
 ○隣近所と協力 ⇒ 顔が見えない、人口多い

<ワーク3> キーワード: 事前の備え
 自助 自助がわかってこそ、共助の成り → 共助
 ・知識として、リスクを考える 具体的な想像して、話合えて ・日頃の近所付き合いを深める。
 ・自分の弱点を知る(ソフト)
 ・自分から手を挙げる

自分の家は自分で守る

E グループ

<富山県で想定される災害>

まず、ご存じ富山県は河川が多いですから、水害に対しては、一級河川、二級河川、両方に目配りが必要です。そして雪。富山はドカ雪が降るような地域なので、当然備えが必要になります。これには、排雪と融雪でめぐりを良くする対策があります。

次に土砂。これはどんな地域でもありえますよね。崖崩れ、地滑り。台風のように、雨が降るかも知れない、風が吹くかも知れない。それから、地震があげられます。地震は怖いですがね。富山では安政の地震から160年たったので、そろそろ起きるのではないかと、という危機感は持っておいた方がよいと思います。我々になじみのある呉羽山には断層があって、非常に危険です。

<災害が起きたときの対応>

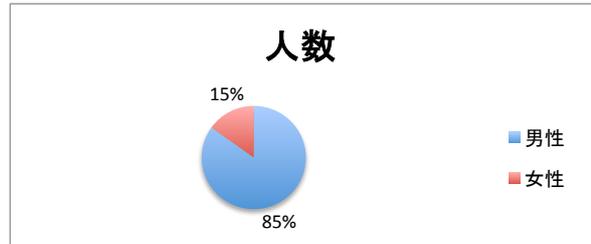
富山で災害が起きたときに大切なことは、避難場所を確保すること、防災意識を高めること、という意見の他に、自衛隊の迅速な対応、普段から外国との友好的な関係を作っておく、他県からの救命ボランティアの要請、HUG〔防災ゲーム〕、それからケガの手当て、消火、防犯、町内会や学校の役割などがあがりました。災害についての情報収集に関しては、家族、親戚への連絡、それから、近所の方々の安否の確認、連絡網の整備、などが重要です。それから、防災グッズの準備という意見もありました。また、町内に誰かリーダーになってもらえる人がほしいという意見もありました。それから、災害に対しては、科学的、客観的に数値を伴う考え方ができるように、ということもあげられました。科学的、客観的な考え方、それに基づく情報があれば安心できると思うんですね。その点では幼児期からの理数教育は大事です。実は、立山には活火山が存在します。これはいつ爆発するかわかりません。その他、家の中に安全な部屋をつくる、お隣さんとの会話を積極的にする、顔と顔のみえるつながりのある社会をつくるのが大事だということになりました。



アンケート集計

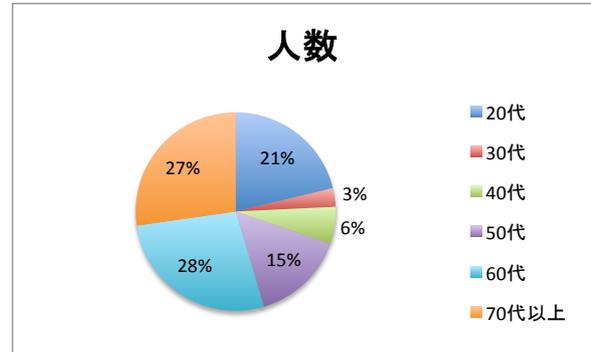
性別

	人数	%
男性	28	84.8
女性	5	15.2
合計	33	100



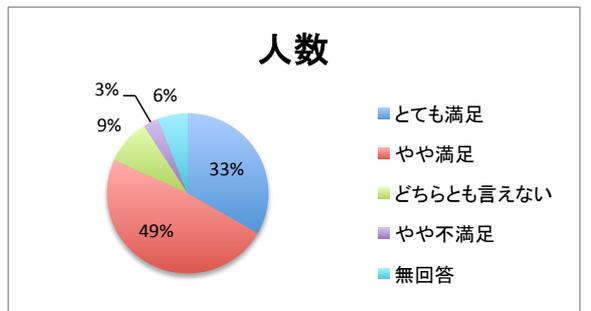
年齢

	人数	%
20代	7	21.2
30代	1	3
40代	2	6.1
50代	5	15.2
60代	9	27.3
70代以上	9	27.3
合計	33	100



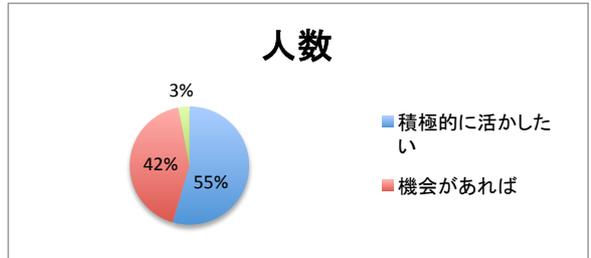
ワークショップの満足度

	人数	%
とても満足	11	33.3
やや満足	16	48.5
どちらとも言えない	3	9.1
やや不満足	1	3
無回答	2	6.1
合計	33	100



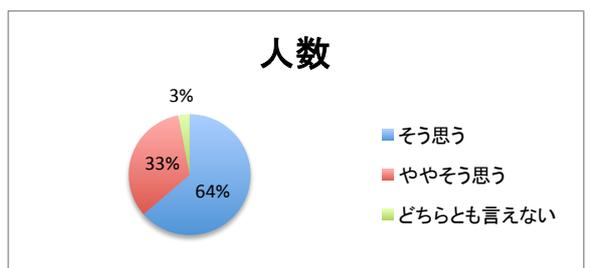
ワークショップを今後に活かしたいですか？

	人数	%
積極的に活かしたい	18	54.5
機会があれば	14	42.4
どう活用すればよいかわからない	1	3
合計	33	100



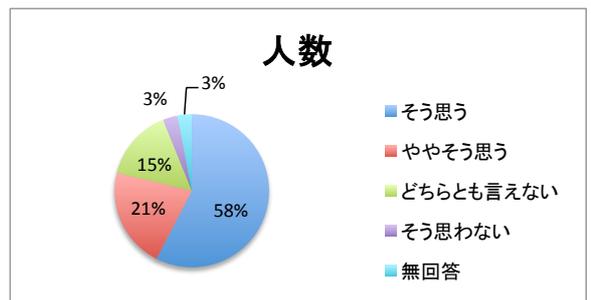
参考になる内容がありましたか？

	人数	%
そう思う	21	63.6
ややそう思う	11	33.3
どちらとも言えない	1	3
合計	33	100



ご自身の意識は変わりましたか？

	人数	%
そう思う	19	57.6
ややそう思う	7	21.2
どちらとも言えない	5	15.2
そう思わない	1	3
無回答	1	3
合計	33	100



アンケート自由記述

Q6 ワークショップでどんなことに気づきましたか。自由にお書き下さい。

- ・ 知らなかった情報を入手できた。
- ・ 自分の災害への知識の無さを自覚しました。
- ・ 班のまとめ役が力不足だったかも。発言者、付箋を貼る人が片寄ってしまった。
- ・ 一つひとつのテーマが漠然としていて、話しづらかった。
- ・ 自主防災組織の重要性を再認識させられました。
- ・ 今まであまり考えてなかったけど、十分考えて行動しなければいけないと思った。町内等、家族、地区等、老若男女等。
- ・ 想像よりも若い方の防災知識、および意識が高い。これからの防災意識の高揚に期待します。
- ・ 人が集まればやはり自分の気づかない意見が出る。
- ・ 避難場所の確認等基本的な事項の再チェックが、家族も含めまず必要。
- ・ まわり避難地の確認。
- ・ 防災士の方が参加されたので、意識向上の必要性を感じた。自分の身は自分で守れるよう努力します。
- ・ 前に比べ、人の話を聞けるようになった。
- ・ 防災ということでリーダーシップをとってしまった。もっと他者の発言を引き出す必要性を感じた。
- ・ 危機感を持つことの大切さ！
- ・ 大学院生の方々と交流でき大変有意義に会話でき、ありがとうございました。
- ・ 日頃災害について漠然とわかっているつもりだったが、ほとんど知識を持っていないことがわかった・・・多少呆然。
- ・ 自分の意識が足りない。
- ・ 防災意識を高めることの必要性を広く伝える。
- ・ 自分と異なる世代の方との、防災に対する知識に差があった。
- ・ 理屈の上だけではなく、参加者皆さんの生活の実態をふまえて災害をとらえる必要があること。
- ・ 学生さん、防災士の方、一般の私などが話し合えて勉強になりました。

Q7 ワークショップで伝えきれなかった活動や考えがありましたら、自由にお書き下さい。

- ・ 個人情報保護法以来「プライバシー」と言い過ぎで、近所にどんな人が住んでいるかも知らせてはいけないような風潮があり困る。
- ・ 避難所の運営の困難さ。トイレ対策、エコノミークラス症候群による災害関連死。
- ・ 中小企業が取り組みとして何ができるか？

Q8 ワークショップを受けて、今後どのようなことをやってみたいと思いませんか。自由にお書き下さい。

- ・ 町内防災会での活用。
- ・ 地域のつながりを持てる行事等への参加。
- ・ 災害に関係したテーマで、地域と学校の交流（とくに中学生）。
- ・ ワークショップの手法を町内会防災活動に活かしたい。
- ・ 職場でも話題にしてみたい。
- ・ 防災士の役割と資格取得。
- ・ 地域とのつながりは大切。
- ・ 地域での訓練等積極的に参加したい。家族、近所、町内と広げていく必要を感じる。
- ・ 正しい知識の勉強。防災知識、意識、技術の向上。
- ・ 防災啓発活動をさらに推し進めたい。
- ・ DIG・HUGのワークショップの実施。
- ・ 危険予知訓練・リスクアセスメント、防災（災害）をテーマに考えてみる。
- ・ こういった話し合いの場で考えたこと、学んだことをまわりに伝えることが防災意識を高めることにつながるだろうと思いました。
- ・ 小・中・高・大・社会人と世代をつなぐ、大きな年齢の幅をもったワークショップは、いろいろな立ち位置からの話が聞けていいと思う。大人だけの防災、子どもだけの防災→大人と子ども、個人、家族、地域、みんなと話し合える場、状況は重要だなと。

- ・ ハザードマップの見直し。
- ・ 地域内での災害についての話し合い。
- ・ 今一度、居住地の災害のリスクを確認してみたい。

Q9 その他、ご意見・ご感想などありましたら、自由にお書き下さい。

- ・ ワークショップの意味を考え何をするのかわからない。
- ・ 検討する災害がしぼられてなく、漠然とした話になった。
- ・ 富山で起きやすい（起きる確率の高い）災害についてやればよかった。
- ・ グループで話し合ったことを発表したあと、グループ内で出た考えや疑問を先生方にも投げかけて助言していただける時間がもう少しほしかった。グループ内で出た不確かな情報、未熟な考えを「共有しただけ」で終わってしまい、話題提供も「～とは～というものです」「～があって被害は～でした」で終わっていたので、それに加えてもう少し踏み込んだ話を聞いてみたかった。
- ・ 富山大学が呉西にも出かけて地域の中で活動して下さい。
- ・ 年に複数回の講座を企画願います。
- ・ 機会があれば、ワークショップに参加したい。
- ・ 今回のようなことをコツコツと続けていくこと。ひとりでも多くの人が参加すること。
- ・ 仕事ざかりの人が一番意識が低いのかもしれない。高齢者は老人会等、子どもたちは学校での訓練等。壮年層が一番たよりないのかも。
- ・ 手話、点字は？
- ・ 富山県は「安全」神話がまかり通り防災に対することに関心が薄い。このようなワークショップを通して「防災」活動を高めたい。
- ・ 回数を増やして実施してほしい。
- ・ 身近なテーマに、気軽に誰でも参加できるような場になるように今後も続けていって下さい。
- ・ 良い時間を皆さんと共有できた。

おわりに

東日本大震災から7年を迎えようとしている今、富山大学地域連携推進機構生涯学習部門では、富山における災害について学び、交流しあう機会を提供しようと、本ワークショップを企画しました。東日本大震災のもたらした傷あとは決して過去のものとなったわけではなく、また、この間日本の各地で起きた地震や豪雨などの災害も同様です。常に災害に備える体制を維持すること、これが日本に暮らす人びとにとってきわめて切実な課題となっているのではないか、そのような思いから企画された事業でした。

本ワークショップの企画は、当初「災害とどう向き合うか」というテーマから出発しました。私ども生涯学習部門と大学院理工学研究部教授の原隆史先生との幾度にも及ぶ協議をふまえる中で、それは「富山でも災害は起こり得ます／その時あなたはどうしますか」という形になりました。参加者の皆さまに、ここ富山の地においても災害というものが実は身近なものであることを実感していただくとともに、災害時の実践的なビジョンを具体化させるという課題意識が明確になりました。

災害とはどのようなものか。話題提供において原先生が提示された映像と解説の数々は、一般の人びとが抱く印象をはるかに上回る、すさまじい破壊力を持って我々に迫り来るものであることを知らしめました。ある参加者の方は「目から鱗」と表現しています。それらのいくつかは、これまでの研究者たちの調べによって、過去の富山で現実に起きたまぎれもない事実であることが明らかとなっています。話題提供を通じ、いかに災害の備えというものが大切なことであるかを学ぶ貴重な機会となりました。「千年に一度」とは、明日富山で起きてもおかしくないものであるということを経験する機会となりました。「もっと踏み込んだ話を聞いてみたい」という感想もあり、参加者の高い学習意欲を感じさせる面もありました。

今回のワークショップは、35名の方々が5つのグループに分かれて進められました。

冒頭ワーク1、富山で起こりうる災害についての話し合いでは、地震、活火山、豪雨と水害、フェーン現象、台風など、多様な災害が想定されることが浮かび上がりました。それらに直面した際にとるべき行動とは、となると万能の

対処法というものがなかなか見つかりません。「災害という大きなテーマに、どこから手をつけていいか、なかなかわからない」という声もありました。ワーク2の話し合いの中で導かれたのは、「災害の種類によって対処が異なってくる」という観点でした。例えば地震の時と大水の時とでは避難場所が異なる場合が出てくるのではないかと、いうものです。

そのような状況判断の正しさは避難行動の正否に関わるものと言えます。ワーク3の、災害への備えについての話し合いで出されたのは、日頃から災害に関する情報収集と家族内や近隣での会話というものでした。ここで、常に最新の災害情報を取り入れ、なおかつそれを共有する必要がある、ということが確認されました。顔の見える関係を築くことが難しい今日、積極的にあいさつを交わすことや町内行事に参加することの意義もまた再確認されました。

この他、避難訓練は非常に重要な機会であること（どうすれば働き盛り世代の訓練への参加を促すことができるのかも含め）、ハザードマップの想定を超える災害を意識する必要があること、家の中に災害対策が施された場所を確保すること、災害時の「弱点」は何かを知ること、などの必要性が提起されました。

災害をテーマとした今回のワークショップは、「重い雰囲気」が伴うものでもありました。これは、参加者の皆さまが真摯に災害と向き合った時間であったことを示していると考えます。

2018年1月31日

富山大学地域連携推進機構・生涯学習部門



災害について学び、考え、実りある語り合いを展開しましょう。

日時 2017年12月17日(日)
13:30～16:00

参加
無料

- **第1部** 話題提供
「我が国の防災事情、
富山で起こりうる災害、
我々(市民)が準備しておくこと」
講師 富山大学大学院理工学研究部(工学)
教授 原 隆史

- **第2部** ワークショップ
* 意外と遠い「居間から玄関まで」の距離。
* 「いざ」というとき本当に動けますか？
* 話し合いや避難訓練をしていますか？
…などについて、グループワークで考えます。

会場 富山駅前Ciビル3F学習室



富山でも**災害**は起こり得ます

その時あなたはどっしりますか？